

認知症高齢者を対象としたパーソンセンタードケアの理念に関する研究  
— 介護福祉教育における社会的認識についての心理学の視点 —

山戸 隆也\*

A Study on the Idea in Person Centered Care with Dementia Older People  
: The Perspective of the Psychology about the Social Cognition

Takaya Yamato

パーソンセンタードケアの提唱者であるトム・キットウッドは「医学モデル」に基づく従来の認知症についての捉えかたを見直し、認知症の人の「その人らしさ (personhood)」を尊重するケア、すなわち「パーソンセンタードケア」の実践を主張した。

日本における介護福祉士養成課程において新カリキュラムが導入されたが、「人間の尊厳」に配慮した介護福祉士養成に向けて、パーソンセンタードケアの理念が、どのような可能性を有するかについては、今後の教育実践を踏まえての検討が必要となる。

**Key words:** パーソンセンタードケア、認知症高齢者、介護福祉士養成、人間の尊厳

I はじめに

2003年に厚生労働省における研究会である高齢介護研究会が出した報告書「2015年の高齢者介護」において、利用者本位の認知症ケアの質の向上が模索されており、“その人らしさ”という言葉が新たな認知症ケアのキーワードともなっている<sup>1)</sup>。

この研究の目的は、認知症高齢者を対象としたパーソンセンタードケアの理念について検討することにある。最初にパーソンセンタードケアについての先行研究から、その特徴について検討した後、新カリキュラムの導入を図る日本の介護福祉教育の実践におけるその理念の可能性について検討する。

とりわけ介護福祉士養成新カリキュラムにおける「認知症の理解」、「人間の尊厳と自立」、「介護実習」といった分野を主たる検討の対象として、パーソンセンタードケアの理念をどのように生かすことができるのかに焦点を当てて考察する。まず「認知症の理解」については、認知症に関する「医学モデル」との関連で「パーソンセンタードケア」

へのパラダイム転換をめぐる議論をもとに考察する。また「人間の尊厳と自立」については、認知症高齢者への差別とその批判という視点から検討する。さらに、「介護実習」については、パーソンセンタードケアの理念を介護実践の場で学ぶことの意義について考察する。パーソンセンタードケアは、もちろん介護福祉教育における他の諸分野とも関連しているが、本稿ではこれら3分野について検討を行うことにする<sup>2)</sup>。

表1 介護福祉士養成課程(新カリキュラム)における領域と教育内容

領域	人間と社会
教育内容	人間の尊厳と自立 人間関係とコミュニケーション 社会の理解 人間と社会に関する選択科目
領域	介護
教育内容	介護の基本 コミュニケーション技術 生活支援技術 介護過程 介護総合演習 介護実習
領域	こころとからだのしくみ
教育内容	発達と老化の理解 認知症の理解 障害の理解 こころとからだのしくみ

出典：社会福祉士介護福祉士学校指定規則  
(平成20年3月24日)より作成

\* 四條畷学園短期大学 介護福祉学科

## II パーソンセンタードケアの特徴

### 1、パーソンセンタードケアにおける認知症の捉え方

水野裕氏によると、パーソンセンタードケア（その人を中心とした介護）は、トム・キットウッドが提唱したものである。<sup>3)</sup> ここで、その特徴についてふれておくことにする。

長谷川和男氏は「痴呆ケアの新しい道」と題する論文の中で、次のように述べている。「最近、内外で痴呆ケアの新しい風が吹き始めた。その中心は、その人らしさを尊重するケアである。それには従来の医学的なモデルから全人的モデルへの転換が前提となる。」<sup>4)</sup>

トム・キットウッドは「医学モデル」に基づく従来の認知症についての捉えかたを見直し、認知症の人の「その人らしさ (personhood)」を尊重するケア、すなわち「パーソンセンタードケア」の実践を主張した。<sup>5)</sup> トム・キットウッドによると「それは関係や社会的存在の文脈の中で、他人からひとりの人間に与えられる立場や地位である。それは、人として認めること、尊重、信頼を意味している」。<sup>6)</sup>

すなわちパーソンセンタードケアの理念は、トム・キットウッドが主張しているように、「関係や社会的存在の文脈の中で、他人から一人の人間に与えられる介護者が認知症の人を固定観念で捉えたり、病人扱いする習慣を捨て、率直で偏見のない態度で、それぞれの独自性を認めて人として出会う」<sup>7)</sup> という方法を通じて、実践することが可能となるのである。<sup>8)</sup>

また、トム・キットウッドは「認知症の弁証法：アルツハイマー病への特別な言及」という論文において、個々人のその人らしさ (personhood) を強調するものの見方を提示し、「医学モデル」についての、よりシンプルなバージョンに基づくものよりも、認知症についてのより包括的で、より決定論的でない考察を提供しており、「ケアについてより人格的で、より楽観的な視点のための道を開くものである」<sup>9)</sup> としている。

### 2、認知症ケアにおける相互作用

認知症の人同士の相互作用について、トム・キットウッドは次のような問題を提起している。すなわち「あるケア現場では豊かな相互行為が起こるのに、他の現場で起こらないのはなぜか」<sup>10)</sup> という問題である。

彼は、この問題に対しての基本的な答えについて、次のように述べている。「その人を中心としたケア（パーソンセンタードケア）のアプローチが持続的に長時間実施されると、多くの心理的ニーズが満たされ始めるのである。経験は間断なくバリデートされ、抱えられることによって安心感が生まれ、ファシリテーションも継続して行われることになる。その結果、個人の資源はもはや消え去ることはなくなり、寝たきりになる恐怖は消える。希望が取り戻され、ケアされた人々は、社会的存在として生きる自信をもてるのである。」<sup>11)</sup>

それでは、認知症の人同士の相互作用がどのように豊かなものとなるようなケアについて検討してみよう。

トム・キットウッドは、極めて暫定的なもので、完全に仕上げるためにはさらなる研究が必要である<sup>12)</sup> と述べた上で表2に示すような認知症の人を対象としたパーソンセンタードケアにおける12の前向きな相互行為（具体的な方法）をリストアップしている。<sup>13)</sup>

表2 パーソンセンタードケアにおける具体的な方法

- ・みとめること  
介護者は、認知症の人を率直で偏見のない態度でそれぞれの独自性を認める。
- ・交渉  
介護者は、認知症の人のすることはわかっていると思いつまず、あえて尋ね、聞く。
- ・共同  
介護者は押しつけや強制などの力を意識して避けること。
- ・遊び  
介護者は自由に子どものように創造的になることができる。
- ・タイムレーション  
認知症の人は直接感覚によって喜びを得る。介護者は感覚を通じてくつろぎを得る。
- ・お祝い  
負担や仕事を超えて、介護者は素直に喜び、人生の恵みに感謝する。
- ・リラクゼーション  
介護者はしばらく手を休め、ゆとりをもち、身体と心に休息を与える。
- ・バリテーション  
介護者は、他者と共感するために自分自身の準拠棒を超える。
- ・抱えること  
認知症の人の経験を落ち着いて確実に敏感に受けとめつつ、介護者はそこにどまる。
- ・ファシリテーション  
認知症の人が行う身振りに対応すべく、意味の創造を共有する。
- ・創造的行為  
認知症の人による創造的行為をあるがままに受け取り、認める。
- ・贈与  
介護者は認知症の人からのあらゆる親切、手助けを十分に謙虚な気持ちで受け止める。

出典:Tom Kitwood, Dementia Reconsidered the person first, Open University Press  
1997 (高橋誠一訳)『認知症のパーソンセンタードケア』  
簡井書房 2005年 P. 208-210から作成。

### Ⅲ 介護福祉士養成課程におけるパーソンセンタードケアの意義

#### 1、認知症ケアのパラダイム

すぐれた科学者は実際に検証する前に、リスクを伴う反証可能な仮説を進んで立てるべきである、というポッパーの主張に立脚し、トム・キットウッドは認知症ケアに関するパラダイム<sup>14)</sup>の転換について次のように述べている。「もしよいケアが、測定可能となるように操作的に定義され、全体の長期的パターンにおける変化を引き起こさないならば、わたしが与えてきた認知症の説明は反証されたことになる。しかしながら、わたしの研究から報告したような変化が、そして、わたしが予測した他のことが実際に発見されれば、もはや認知症に伴う病気の経過が自律的であると見ることはできない。『標準パラダイム』は反証されたことになる。」<sup>15)</sup>

このようにみていくと、パーソンセンタードケアは認知症ケアについて、従来からいわれてきたように思想的なバックボーンを提供するという面だけではなく、認知症ケアの科学性の追求にも貢献するという面も強調されるべきである。

#### 2、人間の尊厳とパーソンセンタードケア

トム・キットウッドによると「身体的であっても精神的であっても、ある種の重い障害をもつ人の人格を奪う傾向を多くの文化が示してきた。」<sup>16)</sup> そうしたなかで「その人らしさ（パーソンフッド）が広く無視され、力のないものは特に価値を低められる。多くの社会では、高齢者を無能で、醜く、厄介なものとして分類し、個人と社会構造の両方のレベルで高齢者を差別する老人差別が行きわたっている。認知症の人は最も極端な老人差別にさらされている。」<sup>17)</sup>

「新しい文化が提案しているのは、知的能力が低下している人びとをよそ者や他人ではなく、同じ人間として見ることであり、集団的無意識の中に長く隠されていたコミュニティの感覚を再び取り戻すことであり、そこは現実において平等に、お互いを受け入れることができる場である。このよ

うな励ましがあれば、私たちは自分自身の老いの事実と、死ぬ前に認知症になるかもしれないという可能性さえも容易に受け入れることができる。」<sup>18)</sup>

また、『認知症の介護のために知っておきたい大切なこと』のなかでトム・キットウッドとキャスリー・ブレディンは、誰しも一般的なレッテルでひとくくりにはされてはならないこと、どんなに障害や不自由があっても、一人ひとり個人として尊重されるものであることを主張している。<sup>19)</sup> さらに「本当のケアの仕事とは、個人を決まった日課に適応させることではなく、むしろ決まった日課を一人ひとりのニーズにできるだけ合わせようとすること」<sup>20)</sup> であるとしている。人間の尊厳について認知症ケアという領域での学びにおいては、彼らの指摘するようなケア観の育成が重要となってくる。

#### 3、介護実習教育におけるパーソンセンタードケアの視点

「介護福祉士養成教育において、介護現場における『実習』のウエイトが非常に重いことは、養成校教員のみならず、学生にとっても周知の事実である。」<sup>21)</sup> パラダイムの転換期にある認知症ケアの領域では、介護実習は、学生にとって現場での実践における専門的知識のあり方について学ぶ機会となるのである。

周知のとおり、介護福祉士養成の新カリキュラムにおいては、実習施設の選択肢が大幅に拡大している。特別養護老人ホームや老人保健施設に加えて、認知症高齢者を対象としたグループホーム、あるいは小規模多機能型の施設等でも実習が可能となった。

学生の実習先が、従来の「医学モデル」に基づいた実践を行う職場であるかもしれないし、パーソンセンタードケアの影響を強く受けている実践に当たるかもしれない。無論、介護福祉実践の現場においては、パラダイムどおりに二通りに分けられるほど単純な話ではない。また、確かに、パーソンセンタードケアが認知症をめぐる様々な問題をことごとく解決していくとは限らない。しかし、認知症ケアという領域において、前向きに取り組んでいこうとする姿勢を学生に期待するとす

れば、パーソンセンタードケアの理念について養成校で学んでおいてから、その実践例にふれる機会を学生がもてるような工夫を行うことも、介護福祉士養成校にとっては意義深いことと思われる。

#### IV まとめ

パーソンセンタードケアの提唱者であるトム・キットウッドによると、認知症高齢者は通常私たちが望むのとまったく同じように、あらゆる面で「人として扱われること」を必要としている。そしてその人らしさ (personhood) が広く無視され、力のないものは特に価値を低められるような社会では、高齢者は無能で、醜く、厄介なものとして分類されており、個人と社会構造の両方のレベルで高齢者が差別されるという老人差別が行きわたり、なかでも認知症の人は最も極端な老人差別にさらされている。<sup>22)</sup>

日本における介護福祉士養成課程において新しいカリキュラムが導入されたが、「人間の尊厳」に配慮した介護福祉士養成に向けて、パーソンセンタードケアの理念が大切である。今後の研究課題としては、パーソンセンタードケアの理念に関する諸概念を、さらに精緻化していくことを通じて、より介護実践に生かすことができるようにすることが挙げられる。パーソンセンタードケアの理念は、新カリキュラムの内容を充実させるような資源としての可能性があり、その理念をどのように生かすことができるのかについて、介護福祉教育の現場での事例に関する実証的研究を積み重ねていくことが重要である。

日本の介護福祉教育のなかでも、認知症高齢者を対象としたパーソンセンタードケアがクーンの意味での「通常科学」に近いものとなっていくような兆しがみられるが、一般に「パラダイム転換」が起こるときに、現実の社会（介護実践の場、あるいは介護福祉教育の場）に混乱をきたすこと、あるいは意見の相違が原因で不和状態が起こることがあってはならない。認知症高齢者を対象としたケアの領域においては、特にこの点が強調されるべきであろう。

(注)

- 1) 村田康子「本人中心の考え方をケアにどう生かすか — パーソン・センタード・ケア」『地域リハビリテーション』Vol.2 2007年12月号 P.1013
- 2) 新しい介護福祉士の教育内容については、表1に示したように、教育体系を基盤となる教養や倫理的態度の涵養に資する「人間と社会」、尊厳の保持、自立支援の考え方を踏まえ、生活を支える「介護」、他職種協働や適切な介護の提供に必要な根拠としての「こころとからだのしくみ」の3領域に再編された（社会福祉士介護福祉士学校指定規則・平成20年3月24日、社団法人 日本介護福祉士養成施設協会『介護福祉士養成新カリキュラム 教育方法の手引き』2008年を参照）。  
また、介護福祉士養成新カリキュラムに関しては、上記の資料に加えて中央法規及び建帛社によるテキストを参考にした。行政による新カリキュラムの内容の提示が十分ではなかったという面を、これらのテキストが補ったということは評価できよう。ただ、これらのテキストの多くは、その刊行のための多大な努力にもかかわらず、各養成校がシラバスを厚生労働省に提出する期限に間に合わなかった。当然のことながら、各養成校の多くの科目は標準的なテキストが不在の状態でシラバスが作成される事態となった。尚、本稿の引用参考文献のうち、2009年刊行のテキストについては、本稿の校正の段階で参考にさせていただいた。
- 3) 水野裕「Quality of Care をどう考えるか — Dementia Care Mapping(DCM) をめぐって—」『老年精神医学雑誌』第15巻 第12号 2004年 P.1384
- 4) 長谷川和夫「痴呆ケアの新しい道」『日本痴呆ケア学会誌』Vol.1 No.1, 2002年 P.39
- 5) Tom Kitwood, 前掲書、及び Tom Kitwood and Kathleen Bredin, *Person to Person A Guide to the Care of Those with Failing Mental Powers*, Gale Centre Publications, 1992 (高橋誠一監訳・寺田真理子訳)『認知症の介護のために知っておきたい大切なこと』筒井書房 2005年を参照。
- 6) Tom Kitwood, *Dementia Reconsidered the person first*, Open University Press 1997 (高橋誠一訳)『認知症のパーソンセンタードケア』筒井書房 2005年 P.20
- 7) Tom Kitwood, 前掲書 P.208
- 8) 『認知症の介護のために知っておきたい大切なこと』のなかでトム・キットウッドは、次のように述べている。「本書の基本的なメッセージは、とても単純

なものです。認知症を抱える方々は、わたしたちが望むのとまったく同じように、あらゆる面で『人として』扱われることを必要としています。」(Tom Kitwood and Kathleen Bredin, 前掲書 P.9)

- 9) Tom Kitwood, The Dialectics of Dementia, Aging and society 10, 1990, 177
- 10) Tom Kitwood, 前掲書 P.167
- 11) Tom Kitwood, 前掲書 P.167
- 12) Tom Kitwood, 前掲書 P.158
- 13) Tom Kitwood, 前掲書 P.158-163, P.208-210
- 14) パラダイムの概念についてトーマス・クーンは、ある業績が「他の対立競争する科学研究活動を棄てて、それを支持しようとする特に熱心なグループを集めるほど、前例のないユニークさ」(T. S. Kuhn, The Structure of scientific Revolution, The University of Chicago Press, 1962 (中山茂訳)『科学革命の構造』みすず書房 1971年 P.12) を持つものであり、「その業績を中心として再構成された研究グループに解決すべきあらゆる種類の問題を提示」(T. S. Kuhn, 前掲書 P.12-P.13) するものである、と述べている。
- 15) Tom Kitwood, 前掲書 P.179。ポPPERによると「他の言明よりも高度に反証可能な言明は論理的により確からしくない言明であり、または反証可能性のより少ない言明は論理的により確からしい言明であるといえる。」(K. R. Popper, The Logic of Scientific Discovery, Hutchinson, 1959 (大内義一・森博訳)『科学的発見の論理(上)』恒星社厚生閣 1971年 P.266
- 16) Tom Kitwood, 前掲書 P.27。
- 17) Tom Kitwood, 前掲書 P.27。
- 18) Tom Kitwood, 前掲書 P.244-245。
- 19) Tom Kitwood and Kathleen Bredin, 前掲書 P.18
- 20) Tom Kitwood and Kathleen Bredin, 前掲書 P.26
- 21) 波多野大介「実習指導教員の責務 一実習支援マネジメントの視点から一」『介護福祉教育』No.26, 2008年7月 P.83
- 22) Tom Kitwood, 前掲書 P.27。

#### 【引用・参考文献】

- (1) Tom Kitwood, Dementia Reconsiderd the person first, Open University Press 1997(高橋誠一訳)『認知症のパーソンセンタードケア』筒井書房 2005年
- (2) Tom Kitwood, The Dialectics of Dementia, Aging and society 10, 1990, 177-196
- (3) Tom Kitwood and Kathleen Bredin, Person to Person

A Guide to the Care of Those with Failing Mental Powers, Gale Centre Publications, 1992 (高橋誠一監訳・寺田真理子訳)『認知症の介護のために知っておきたい大切なこと』筒井書房 2005年

- (4) Sue Benson, Person-Centred Care, Hawker Publications 2000 (稲谷ふみ枝・石崎淳一監訳)『パーソンセンタード・ケア 改訂版』クリエイツかもがわ 2007年
- (5) Sue Benson, The care assistant's guide to working with dementia, Hawker Publications 2002 (高橋誠一監訳・寺田真理子訳)『介護職のための実践! パーソンセンタードケア』筒井書房 2007年
- (6) 水野裕「Quality of Care をどう考えるか 一Dementia Care Mapping(DCM) をめぐって一」『老年精神医学雑誌』第15巻 第12号 2004年
- (7) 水野裕『実践パーソンセンタードケア』ワールドプランニング 2008年
- (8) 村田康子「本人中心の考え方をケアにどう生かすか 一パーソン・センタード・ケア」『地域リハビリテーション』Vol.2 2007年12月号
- (9) 長谷川和夫「痴呆ケアの新しい道」『日本痴呆ケア学会誌』Vol.1 No.1, 2002年
- (10) 石崎淳一「痴呆性高齢者に対する包括的心理的援助」『心理臨床学研究』第22巻 第5号 2004年
- (11) 波多野大介「実習指導教員の責務 一実習支援マネジメントの視点から一」『介護福祉教育』No.26, 2008年7月
- (12) T. S. Kuhn, The Structure of scientific Revolution, The University of Chicago Press, 1962 (中山茂訳)『科学革命の構造』みすず書房 1971年
- (13) K. R. Popper, The Logic of Scientific Discovery, Hutchinson, 1959 (大内義一・森博訳)『科学的発見の論理(上)(下)』恒星社厚生閣 1971年
- (14) 一番ヶ瀬康子・黒澤貞夫編『介護福祉士思想の探究』ミネルヴァ書房 2006年
- (15) 小澤勲「認知症を生きる人たち」上野千鶴子他編『ケア その思想と実践 2 ケアすること』岩波書店 2008年
- (16) 金子仁郎・新福尚武編『老人の精神医学と心理学』垣内出版 1972年
- (17) 小倉千恵子他「教育現場における認知症ケアについて 一パーソンセンタードケアによる認知症ケア: センター方式の活用状況一」『第15回日本介護福祉学会大会プログラム・要旨集』2007年 P.120
- (18) 土田宣明『行動調節機能の加齢変化』北大路書房 2005年
- (19) 川廷宗之編『介護教育方法論』弘文堂 2008年
- (20) 山本真理子他編『社会的認知ハンドブック』北大路書房 2001年
- (21) 社団法人 日本介護福祉士養成施設協会『介護福祉

- 士養成新カリキュラム 教育方法の手引き』2008年
- (22) 黒澤貞夫・中島健一編『新・介護福祉士養成講座① 人間の理解』中央法規 2009年
  - (23) 上原千鶴子・池田明子編『新・介護福祉士養成講座⑩ 介護総合演習・実習』中央法規 2009年
  - (24) 長谷川和夫・永田久美子・宮島渡編『新・介護福祉士養成講座⑫ 認知症の理解』中央法規 2009年
  - (25) 黒澤貞夫『介護福祉士養成テキスト1 人間の尊厳と自立』建帛社 2009年
  - (26) 峯尾武巳・黒澤貞夫編著『介護福祉士養成テキスト13 介護総合演習』建帛社 2009年
  - (27) 長谷川和夫編著『介護福祉士養成テキスト15 認知症の理解』建帛社 2008年
  - (28) R.Adamus, Social Work and Empowerment : Third Edition, Palgrave Macmillan 2003 (杉本敏夫・斎藤千鶴監訳)『ソーシャルワークとエンパワメント』ふくろう出版 2007年

－ 2008. 12. 20 受稿、2008. 12. 25 受理－